2022年10月2日佐土原キリスト教会礼拝説教
聖書箇所：マルコ福音書11章20～25節
説教題：疑わず信じて生きる

こんな話があります。ご主人に先立たれたケニアのAさんは広い土地を相続しました。ところが、その土地の大半は小高い山によって占められ、放牧にも耕作にも適しません。Aさんは次第に経済的に困るようになり、「この山さえなければ、穀物を植えたり、羊を飼ったりできるのに」といつも思っていました。Aさんはある時、「だれでも、この山に向かって、『動いて、海に入れ』と言って、心の中で疑わず、ただ、自分の言ったとおりになると信じるなら、そのとおりになります」(マルコ11:23)という聖書の言葉を知って心打たれました。「すごい。うちの山に向かって『平らになれ』と言って、疑わないで信じるなら、そうなるのだ」。その彼女に、ある宣教師は言いました。「とんでもない。イエス・キリストは、比喩として『問題の山』について語れたのですよ」。でもAさんは聞きました。「でもこの言葉は、本当にイエス様が語られたのですよね」。宣教師は「そうです」と答えました。Aさんはその日から毎日、「主イエスの御名によって命じる。山よ、平らになれ。イエス様、山を平らにして下さい」。2か月が過ぎましたが、山はびくともしません。それでも諦めずに、毎日山に命じ、神に祈り続けました。4か月が過ぎた時のことです。建設省の役人がAさんを訪ねて来ました。「道路建設のために大量のアスファルトの原料が必要です。大学に調査をさせたところ、お宅の山はコールタールの原料の塊だと分かりました。ぜひお宅の山を買い上げたいのです」。「神がついに私の祈りを聞いて下さった」、こう確信したAさんは大喜びで値段を交渉して、ついに400万ドルで売却が決まりました。アッと言う間に、山は崩されて平らになりました。おまけに報償金までついて来たのです。凄い証しです。いつも、いつもこうなるわけではないでしょうが、しかしイエス様の言葉を信じて、疑わないで祈って行く、凄い力だと教えられます。

前回「イエス様の宮聖め」の個所を学びました。エルサレムの神殿で礼拝者をカモにして商売をしている商人達を、イエスが神殿から追い出されたという出来事でした。しかし「宮聖め」の前に「イエス様がいちじくの木を呪う」場面がありました。月曜日の朝、ベタニヤからエルサレムに向かわれる時、イエスは空腹を覚えられ、葉の繁ったいちじくの木の実を探された。でも、そのいちじくは、葉は見事に繁っていたけど、実は全くつけていなかった。そこでイエスが「今後、いつまでも、だれもおまえの実を食べることのないように」(14)、つまり「実が実らないように」と呪われた、という出来事でした。その後に「宮聖め」がありました。今日の個所は、その続きになります。

その翌朝―(火曜日)、イエス様と弟子達がベタニヤからエルサレムへの同じ道を通ったら、イエスが呪われたいちじくの木が、「実を実らせない」どころではない、根元から枯れていたのです。ペテロが、いちじくの木が枯れているのに気づいて、そのことをイエスに告げる、そこからこの個所は始まります。イエスは言われます。「神を信じなさい。まことに、あなたがたに告げます。だれでも、この山に向かって、『動いて、海にはいれ』と言って、心の中で疑わず、ただ、自分の言ったとおりになると信じるなら、そのとおりになります」(22～23)。言い換えると「いちじくの木が枯れたくらいで驚くのか。あなた方が本当に信仰を持って祈るなら、そして言葉をかけるなら、いちじくの木が枯れるどころではない。山だって動いてしまう、そういう強い力を持っているではないか」。イエス様は、何を言っておられるのでしょうか。この個所は、「宮聖め」とどう結びつくのでしょうか。私達は、何を学べば良いのでしょうか。

そのことを理解するために、もう一度「宮聖め」のことを短く復習したいと思います。エルサレムの神殿では賑やかな神殿礼拝が行われ、そのために神殿に捧げる神殿税の貨幣を両替する商人、犠牲の動物を売る商人達が、賑やかに商売をしていました。それはあたかも、豊かに葉だけが繁っていて、実を実らせていないいちじくの木と同じ状態でした。それをイエス様は、厳しく戒められました。ただ言葉で叱るだけではなく、台をひっくり返したり、人々を追い出したりしながら、行

動によってその状態に抗議されました。そのようなイエス様の激しい批判は、「このままだったら神の民ユダヤ人そのものが、その共同体そのものが、いちじくの木のように呪われた存在になってしまう、枯れてしまう」、そういう危機意識の中で為されたことでした。(実際、この 40 年後、ユダヤ人国家は滅びてしまうのです)。神殿には、犠牲が捧げられ、様々な信仰の言葉が飛び交っていたかも知れない、しかしイエスは、「祈りがない」と言われました。いくら賑やかに神殿礼拝が行われていても、「真実の祈り」がないのです。「『真実の祈り』がないから、民は信仰の実を結ぶことが出来ないのだ」と言われたのでした。

では、なぜ「真実の祈り」がないのか。お読みした 22～23 節は、「祈り」ついて教えておられる個所ですが、ポイントは「心の中で疑わず」という言葉です。つまり「なぜ真実の祈りがないのか」、その一番の問題点は「心の中に疑いがある」ということなのです。「『疑い』があるから祈らない。祈っても、その祈りは『真実の祈り』にならない」、そう言われるのです。

私達はどうでしょうか。私達には、「疑い」はないでしょうか。私達も「祈り」の言葉を口にします。しかし言葉とは裏腹に、それを祈っている私達が、心の中では疑っている、そういうことはないでしょうか。あるいは、「祈らないといけないと思うから祈るけど、現実を見ると、私の祈りが聞かれるようには思えない」、そう思うことはないでしょうか。祈りながらも、心のどこかに「この祈りが何になる」と囁く声を聞く、そういうことはないでしょうか。「ヤコブ書」にはこうあります。「ただし、少しも疑わずに、信じて願いなさい。疑う人は…二心のある人で、その歩む道のすべてに安定を欠いた人です」(ヤコブ 1:6～8)。「二心」。「言葉を語っている心」と「それを疑っている心」、二つの心が私達の中にある。信じているつもりだけども、心がどこかで分裂してしまう。そういうものが私達の中にもあるのではないでしょうか。

「疑い」というのは、どこから来るのでしょうか。ある社長さんの言葉が心に残っています。この方は、阪神大震災の時に 5 歳の息子さんを天に送られた方です。仕事でも色々な試練を経験された方ですが、こう言われるのです。「信仰を持つということは、どんな状況でも、自分には思わしくない状況に思える時にも、必ず背後で神様が事を行って下さっている、と考えられることでしょう。それが何でも、今の自分にとって最善のことを神様はして下さっている、と思えることが信仰でしょうし、今までを振り返ってみて、確かにそうだったと思えることは感謝なことです」(宮原寿夫)。つまり、「疑い」というのは、私達が明確な 1 つの基準に立たないところから来るのではないか、と思うのです。「神は生きておられ、私に最善のことをして下さる」というところに立つ、そこがあやふやになる時、信仰がグラグラして来る、疑いが出て来るのではないでしょうか。私などは、いつもそうです。

イエスは「その疑いを捨てる信仰に生きよ」と言われるのです。だから繰り返しますが、私達も、心の中に明確な 1 つの基準を持たなければならないと思うのです。「私は、神を信じる、神の救いを信じる、神の祝福を信じる。神は最善をして下さる」、そういう基準を持ちたいのです。そこから身の回りのことを判断して行きたいと願うのです。

しかし、「疑わない信仰を持つ」、「疑わない信仰に生きる」とは、具体的にはどうすることでしょうか。「山に向かって『海に飛び込め』と命令すること」でしょうか。そうではないでしょう。

まず、ここで言われている「山」とは何でしょうか。初めにご紹介した「A さん」の話にもあったように、当時「山を動かす」とは、「困難を除去する―(大きな問題を解決する)」、そういう意味で使われたのです。イエス様にとっての困難とは何だったのか。

もう火曜日です。十字架は 3 日後、金曜日に迫っています。十字架が迫れば迫るほど、イエス様が見ておられたのは「人の罪」だったと思うのです。人の頑なさ、身勝手さ、自己絶対化、無関心、無慈悲、そういったものがイエス様に圧し掛かるのです。宗教家が怒りと憎しみに燃えて敵対して来るのです。神の名の下にイエス様を迫害するのです。そういったものが「山」のようにイエス様

の前に立ちはだかっていました。それでもイエス様は、十字架の道を歩んで行かれました。それが神の御心だと信じて、それが神の愛を表す道だと信じて、歩んで行かれました。もう 1 つ見ておられたのが、「死の山」だと思います。私は、人間としてのイエス様は「死んだら復活する」と知っておられたのではないと思います。信じておられたのだと思います。「神の御旨に従って死ぬ時に、神が必ず復活させて下さる」、そういう信仰を持って、いわば神に懸けて行かれたのだと思うのです。しかし「死」は、人にとって巨大な「山」です。私達にはどうにもならない「山」です。生と死の間には、どうにもならない断絶があります。いずれにしてもイエスは、「罪の山」、「死の山」を見ておられたと思います。しかしイエス様は、ご自分が「…山に向かって、『動いて、海にはいれ』と言って、心の中で疑わず、ただ、自分の言ったとおりになると信じるなら、そのとおりになります」(22～23)と言われたように、神の御旨に従い、神を信じ、自分の前に置かれた道を進まれました。そして十字架を成し遂げられました。そして復活されたのです。そのようして「罪の山」、「死の山」を動かされたのです。罪人には、悔い改めて「神の子」とされる道が開かれました。「死」が「復活」に繋がる驚くべき道が開かれました。私達は甦るのです。そのことは、言葉を換えれば、イエスは「『罪人を悔い改めに導いて神の子にしようとされる神の愛』を証しされた」、「『死んだ者を甦らせることの出来る神の力』を証しされた」、と言うことが出来ると思うのです。イエス様は、「疑い」を捨てて、神を信じ切って生きることによって、「神を、神の愛を証しされた」と言っても良いと思います。私は、「疑わない信仰」に生きるということは―(それは何より「神の最善に信頼して生きる」と言うことでしょうが…)、一歩踏み込んで言うならば、それは「神を証しする」ということ、「神の愛と恵みの証し人になる」ということだと思うのです。当時、ユダヤの人々は、言うならば、神の愛を証しすることに失敗したのです。だからこそ、私達は「神の証し人」になるように励まされるのではないでしょうか。

そして、イエス様は、「神の愛と恵みの証し人」としての在り方を 2 つ、教えて下さっています。1 つは 24 節です。「祈って求めるものは何でも、すでに受けたと信じない。そうすれば、そのとおりになります」(24)。祈る時に「これからどうなるのだろうか」と不安の思いの中にいるだけでは、祈れないのです。強い励ましがあるから祈ることが出来る、諦めないで祈り続けることが出来る、そういうことがあると思います。イエス様は「すでに受けたと信じなさい」(24)と言われました。過去形です。「神は既に祝して下さっている、それを信じなさい」と言われるのです。

以前、「百万人の福音」に韓国の有名な殉教者である朱基徹(チュ・キチョル)牧師の息子さん、朱光朝(チュ・クワンチョ)さんの証がありました。彼は、牧師である父を日本軍によって、同じく牧師である兄を北朝鮮の共産軍によって殺されます。彼は絶望して「神よ。あなたはあまりにも過酷な方です」と叫ぶのです。そしてそれ以来、祈ることを一切拒否するのです。やがて妻の導きによって教会には行くようになりました。やがて執事にもなりますが、しかし「幼い頃、父のために必死で祈った祈りに神は答えてくれなかった」、その恨みから決して祈りはしなかったのです。「祈らない執事」として有名になったくらいです。しかし、やがて 1 人の牧師を通して傷が癒される時が来ます。「過去の苦しい環境のために挫折されたでしょうが、神は真実です。チュ執事を試練によって訓練し、よりいっそう大きな栄光と尊さをお与えになられるのです…」。少しずつ父に起こったこと、兄に起こったことを受け入れられる思いが与えられます。さらに、これまでの自分の歩みに添えられていた神の御手に気づくようになるのです。そしてこう書いておられました。「一家離散で心細く、ひもじかった、その瞬間にも神様が見守っておられたこと…教会の後ろの座席で 1 人で寒さに震えていたその瞬間にも、神様は私を見捨てていなかったこと、今こそ、それが良く分かる。そのことを証したい」。彼は、「『神は私を見放している』と思った。でも、その時も、神は私と共におられた」と言うのです。彼と同じことが私達にも起こっているのではないでしょうか。私が鬱で入院していた時、友人が来て言いました。「神様は、お前のために既に業を始めておられる

んだよ」。私は、信じることが出来ませんでした。でも、それは本当でした。私達が、神の御手を感じられないような時、でも既に、そこに神の手は添えられているのではないでしょうか。疑いを捨てて、御言葉を信じて、祝福の中にいることを信じて、今を生きる、それが私達を、神の証し人として生かすのではないでしょうか。

もう 1 つは 25 節です。「また立って祈っているとき、だれかに対して恨み事があったら、赦してやりなさい。そうすれば、天におられるあなたがたの父も、あなたがたの罪を赦してくださいます」(25)。何を言っておられるのでしょうか。申し上げたように、「疑い」を捨てること、それは神様への信頼を生きることです。そのためには、私達の魂が神様に近づくことが必要だと思います。神に近づくとは、神の御心に近づくということです。神様と心を合わせることです。聖書に「主は、その御目をもって、あまねく全地を見渡し、その心がご自分と全く一つになっている人々に御力をあらわしてくださるのです」(2 歴代 16:9)とあります。そのポイントとしてイエス様が教えて下さるのが、「赦し」ということなのです。なぜなら、イエス様が、神の独り子が、十字架に架かって成し遂げられたこと、それは私達、罪人の「赦し」だったのです。ある神学者は「神の『赦し』への感謝は、人への『赦し』という形で現れる」と言いました。であれば、私達が「赦し」に生きること、それは「神の愛と赦し」を証しすることになるのではないでしょうか。だからイエス様は「主の祈り」の中に「我らに罪をおかす者を、我らがゆるすごとく…」の一節を入れて教えて下さったのではないでしょうか。リンカーンについて次のような話があります。アメリカ合衆国から南部諸州が離反して、南北戦争が起こりましたが、北軍が勝った時、ある人が北軍の指導者リンカーン大統領に聞きました。南軍(南部)の人々をどうしますか。リンカーンは答えました。「私は、離反など全くなかったかのように彼らを扱うつもりです。なぜなら神ご自身が私達をそのように扱われたのですから」(A リンカーン)。彼の赦しは、神の赦しを証ししたのです。私達も、私達のような者が全く赦され、祝福の道に置かれている、そのことを疑わず、主の御心に立つ、赦しに生きる、そのことが大切ではないでしょうか。その時、私達は整えられ、主の証し人として生きて行けるのではないでしょうか。

この前、ある方としみじみと「神様に恵んで頂き、その中を生きて行けること、本当に感謝ですね」ということを分かち合いました。そして「この恵みをどなたかに伝えることが出来れば、良いですけど…」というところに話は進みました。神への信頼に生き、神の恵みを疑わずに祈り、神の証し人として生きる、そのような信仰生活でありたいと願います。